

巻頭言 「地域とともに～ 創価大学地域・産学連携センターの活動と展望」 地域・産学連携センター副センター長 安田賢憲……1	
[WLC] WLCの取り組み……2-3	
[GCP] GCPの取り組み……4	
[SPACE] 2023年度秋学期についてのご報告……5-6	
[CETL] CETLの取り組み……7	
データサイエンス教育推進センター……8	
新任教職員紹介……8	

地域とともに～ 創価大学地域・産学連携センターの活動と展望

地域・産学連携センター副センター長 安田賢憲



地域・産学連携センターは、地域連携センター、社会連携・知的財産戦略本部の機能を統合し2019年に設立された。本センターでは、創価大学の位置する多摩地域を中心に、自治体、大学コンソーシアム八王子や各種団体との地域連携活動に取り組むとともに、企業との共同研究等の産学連携活動、研究活動により生み出された知的財産の戦略的活用と社会実装の推進に取り組んできた。近年では産学連携の新たな取り組みとして、アントレプレナーシップ教育、大学発ベンチャーに代表されるスタートアップ支援にも力を入れている。

地域連携で最大の取り組みである大学コンソーシアム八王子での活動では、例年学生発表会において本学が上位入賞を果たしており、2023年12月に行われた第15回学生発表会では3団体が最優秀賞を受賞。地域からも非常に高い評価を得ている。

2023年8月には、伊与田副センター長が講師として大学コンソーシアム八王子との共催による「夏休み中学生いちょう塾・作って遊ぼう！マイコンボード～回路づくりとプログラミングに挑戦～」を開催。八王子市在住の中学生8名が参加し、プログラミングと電子回路設計の基礎を学んだ。

産学連携では創価大学発ベンチャーである株式会社コアシステムジャパンとの連携により2022年度に採択された成長型中小企業等研究開発支援事業による共同研究を推進。大学見本市イノベーションジャパンを始めとする各種展示会への出展といった技術移転活動も積極的に行い、研究成果の社会実装を実現した模範的な産学連携事例として期待されている。

また理工学部の研究成果を中心に知的財産権の権利化も積極的に推進。2023年度は特許4件を出願するとともに、2024年2月には理工学部で育成された桑の新たな品種2件を出願、食材としての桑の果実の活用に向けて準備を進めている。

そして近年の国を挙げたスタートアップ支援の流れに対応すべく、昨年度よりベンチャービジネスプランコン

テストを開催。2023年度は、11月8日に東京都中小企業振興公社が運営する東京創業ステーション多摩に協力を仰ぎ、ビジネスプラン作成で実績のある講師によるビジネスプラン作成講座などを開催し、1月29日に書類審査を経た5チームによる発表会を行った。審査は、①提供価値の解像度、②成長性・将来性、③競争優位性など8項目の観点から、本学卒業生の起業家3名を含む実務家4名と望月センター長が行った。学生は審査員との質疑応答や大会終了後のやり取りを通じて自分達のビジネスアイデアをブラッシュアップする貴重な機会を得ていた。なお、コンテストの結果の詳細などについてはぜひ大学HPなどをご高覧いただきたい。

今後、大学が「知のプラットフォーム」として存在意義を高めていくためには、現実社会のさまざまな問題に目を向け、それをどう解決していくのかについて、現場に足を運んで当事者の話を聞き、交流の中から智慧を生み出していくデザイン思考的な発想が不可欠である。そのためには、学生の学びの場を地域に拡げ、積極的に交流を重ね、信頼関係を構築し、共創していくことが必要だと思われる。本センターとして、その支援を積極的に行っていききたい。幸い、本学には、法学部のまちづくり八王子フィールドワーク、経営学部の地方創生ワークショップ、理工学部の丸田ゼミの活動ように自治体、地域産業界と連携した取り組み、さらには積極的に地域貢献を行っているクラブ活動など、数多くの優れた取り組みをしている組織が多い。まずはこのような取り組みを可視化し、本学として何ができるのかを発信し、地域との結びつきをさらに深められるような取り組みができないか、模索したいと考えている。

と他、本学は開学50年を超え、社会で活躍する優れた知見や経験を持つ数多くの卒業生を擁する。これら卒業生と現役学生との共創の機会を提供できると、本学らしい「価値創造」ができるのではないかと考えている。そのような取り組みについても検討できないか、模索したい。

タイ英語教育学会国際大会参加と キングモンクット王工科大学トンブリ校訪問報告

2024年1月下旬ワールドランゲージセンター（WLC）の尾崎センター長とホーネス教授はタイ英語教育学会国際大会での研究発表とモンクット王工科大学トンブリ校（KMUTT）訪問のため、タイを訪れた。タイ英語教育学会国際大会での研究発表の様子やKMUTT訪問の目的や成果について報告する。

タイ英語教育学会国際大会は1月26日、27日の2日間タイ北部のチェンマイで行われた。例年この時期に行われるタイ英語教育学会の大会はアジアを中心に約30カ国から500人ほどの研究者、教育者が参加する大規模な学会である。このことから多様な参加者の集う学会と思われるが、一方で、自国と共通する文化的背景を持つ国・地域からの参加者にも出会う。各国・地域ともそれぞれに課題を抱えながらも、実は国・地域を隔て同じ問題に取り組んでいる場合も多い。そうした国・地域からの参加者の実践や成果報告には、自国では得られない視点や知見が含まれることもあるため、講演や研究発表に真剣に聞き入る参加者が目立つ。

そのような中で、尾崎センター長は本学共通科目英語科目での認知・非認知能力の統合を目指す取り組みについて発表した。当初、こうした話題はどこまで受け入れられるのか不安もあったが、発表には予想を上回る数の方々が来場し、熱心に聞いて下さった。発表途中では参加者の多くが、研究方法や分析結果等についての拙いスライドをスマホで何度となく撮影しておられた。終了後には貴重なコメントや質問をいただいた。最後には「この研究の論文を送

ってほしい」と依頼されるなど参加者の関心の高さがうかがえた。知識の伝授やスキルの訓練の成果を上げるには、人間性の同時育成も大事だという主張は、多様な取り組みの一つではあるだろうが、確実に受け入れられ、持ち帰っていただけたと確信できた。とともに、この話題は国・地域を超えて共通する関心事であると思われた。人間教育の最高学府を標榜する本学において、この教育方針は忘れてはならないと思う。そしてこれが、国・地域を超えての関心事であれば、そこから対話を通して、文化や言語の背景が違っても手を携えてよりよい方法や理論的基盤の整備を開始できればと願った。

タイ英語教育学会国際大会での発表を成功裏に終え、1月28日にバンコクへ移動した。1月29日、30日とバンコクにあるKMUTTを訪問するためだ。KMUTTでは、先方の教職員の方々の厚い歓迎を受けつつ、キャンパスの視察、2024年度から開始するKMUTTでの短期語学研修とそれを含む世界市民育成の取り組みについて精力的に動き、議論した。KMUTTは工科大学ではあるものの、英語教育に力を注ぎその取り組みは注目に値する。KMUTTの英語教育を統括するのが今回の訪問の受け入れ先となった教養学部所属のナジリー准教授をはじめとする教職員の方々である。KMUTTにはナジリー准教授らが運営に携わるグローバル能力開発センターやセルフアクセスセンターがある。そこでは学生の創造性や協調性、コミュニケーション能力、自律性など世界市民の要件の育成に取り組んでいる。これらは本学のWLCの目的やプログラムとよく似



ている。しかし、WLCがKMUTTの英語教育に及ばない点も多くある。それらには、KMUTTが独自に開発した英語能力測定テスト、批判的思考力測定テスト、ソフトスキル（非認知能力）育成プログラム等がある。また、KMUTTではこの独自開発の英語能力測定テストを全学生が卒業年次に受験しなければならないことや、ソフトスキルの開発を目的とした地域貢献活動などに一定時間参加しなければならないなどの制度が確立している。これらにもWLCはぜひとも学ばなければならない。二日間の協議は、

短期語学研修の内容と、世界市民育成の方法等につき多くの点において合意し、有意義な語らいとなった。何よりもWLCが目指す語学力の育成を通じた世界市民の輩出という目的を、先んじて実行しているKMUTTに一つのモデルを見たことは大きな収穫であった。今後は、今回の訪問の成果を踏まえWLCの教員、支えて下さる職員の方々と意見を交換しつつ、WLCと本学の外国語教育の発展に一段と邁進していく所存である。（尾崎 秀夫）

2024年度CEFR導入プロジェクト

共通科目英語科目にヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を導入するプロジェクトは、コリン・ランドル准教授（WLC副センター長）、ユーケリア・ドネリ准教授、フォレスト・ネルソン、ブライアン・ブシュナー各講師、ジャーリアン助教のチームにより進められている。

本プロジェクトの第1段階では、シラバスの修正に焦点を当て、第2段階では、教室内活動への応用に重点を置いた。これらを踏まえ、現段階ではCEFRについて学生の理解を向上させることと、欧州言語ポートフォリオ（ELP）の修正版を導入することを目的としている。

これらを通し、学習プロセスにおける学習者の主体性の発揮という、WLCとCEFRの共通の目的を実現する。チームはCEFRを紹介するオンライン資料を作成し、World Language Portfolio（WLP）と呼ばれるELPのオンライン日本語版も開発した。2023年度の秋学期に、チームはこれらを試行した。改良を加え、2024年度春学期に本格的に実施する予定である。

2024年度の経験から学んだ教訓を取り入れ、2025年度からは、学生が自身の学習をより適切に管理できるよう、より多くの共通科目英語科目でこれらの教材の使用を目指している。（コリン・ランドル）

English I-IVレベル別教員会議

2023年度秋学期の共通科目英語科目のEnglish I-IVレベル別教員会議は、以下を目的にオンラインで2回開催された。

■ English I-IVの4レベルすべてにわたり、シラバスに組み込まれたCEFRのCan-doステイトメントを「I」から始まる形式に簡略化する。これは、Can-doステイトメントを学生にとってよりわかりやすくし、科目の内容と目標が学生に効果的に伝わるようにするためである。

■ 同じレベルを教える教員が集まり、経験を共有し、協力と情報交換を促進する機会を提供する。

教員会議中、参加者は最初にブレイクアウトルームでの小グループセッションに臨み、現状の問題点やシラバスの修正に関して話し合った。続いて、メインルームに戻りそれらについて共有した。その後、コーディネーターは、これらの会議において出された意見をまとめた。コーディネーターはそれらを慎重に検討し、2024年度のシラバスに必要な修正を加えた。この協同作業により、科目の内容は刷新され、学生にとって親しみやすいものになった。レベル別教員会議は、WLC内での開かれた意思疎通、協力、継続的な改善を促進している。今後も継続的に開催する計画である。

（ユーケリア・ドネリ、フォレスト・ネルソン）

■WLC 教員の紹介 アンドリュー・トゥイド講師



トゥイド講師は1972年、アメリカのオハイオ州コロンバスで生まれた。トゥイド講師は、オハイオ州立大学で音楽の学士号を取得しており、以前はピアノの教師をしていた。2008年にワシントン大学でTESOL（英語教授法）の修士号を、2019年にアナハイム大学でTESOLの教育学博士号を取得した。彼の研究対象は、言語学習における学習者の自律性と心理学である。トゥイド講

師は、アメリカ国務省から派遣されカンボジア、マレーシア、タイで教師養成トレーナーとして働いてきた。彼は今も東南アジアの教師と教師養成トレーナーをサポートし続けている。トゥイド講師はWLCセルフアクセスセンター（SAC）のコーディネーターとして、SACチームと協力しながら、学生の自律的な学習をサポートする新しい教育実践を導入している。空いた時間には、ピアノを弾いたり、クメール語を勉強したり、2匹の猫の世話を楽しんでいる。

第13回成果報告会を開催

2023年12月9日、グローバル・シティズンシップ・プログラム（GCP）の第13回成果報告会が開催されました。成果報告会は、2年次授業のプログラムゼミⅣの授業において取り組んだ地球的課題に対して、学生の視点から取り組める具体的な提案を発表することを目的としています。

今回は「探求の航海 希望へと舵を取れ」をテーマに、13期生の24名が4つのグループに分かれ、国内外の課題に対して解決策を発表しました。成果報告会には、北野尚宏教授（早稲田大学、元JICA研究所所長）がコメンテーターとして参加され、それぞれのグループの発表に対して講評を頂きました。



第11回GCP修了式を開催

第11回GCP修了式が2024年3月17日に開催され、鈴木学長、田代理事長、西浦副学長らが出席し、GCP9期生、10期生、11期生の修了生29名の新たな出発を祝福しました。

今回GCPを修了したGCP11期生は、新型コロナ流行により、2020年入学時の授業がすべてオンラインとなり、大学の入構もできず、大学生活に大きな影響を受けましたが、そのような状況を乗り越え、国内外の大学院進学、国際的な優良企業への就職など、GCP生それぞれが進路を勝ち取り、晴れやかに修了式を迎えました。



フィリピン・キャピトル大学研修を実施

2024年2月18日から2月29日に、フィリピン共和国キャピトル大学において海外短期研修が開催され、GCP14期生の29名が参加しました。研修開講式には、キャピトル大学のファレス首席副学長、トーレス教務担当副学長が出席され、教員、学生らと共にGCP生を温かく迎えてくれました。研修では市庁舎や行政機関、学校、医療施設等での調査を実施し、現地調査を取りまとめたリサーチ発表会では、キャピトル大学の先生方がそれぞれのグループの発表に対して丁寧に講評し、研修の成果を高く評価されました。GCP生は研修を通して、世界市民としての自覚を深め、勉学への挑戦を決意していました。



タイ・タマサート大学オンラインフォーラムを開催

2023年3月21日には、タイ・タマサート大学とのオンラインリサーチフォーラムを開催し、GCP14期生が、フィリピン研修のリサーチ成果を発表し、タマサート大学からは、在タイ王国フィリピン大使館よりフィリピンスタディーズの支援を受けている学生がフィリピンに関する発表を行いました。開会式では、ミリセント・パレデス在タイ王国フィリピン大使がビデオメッセージを寄せられ、フォーラムの開催がフィリピンの理解を深め、日本、タイ、フィリピンとの友好が一層深まることへの期待を述べられました。





創価大学ラーニング・commons「SPACE」総合学習支援センター 2023年度秋学期についてのご報告

SPACEリーディングエリアの書架に 2コーナーが開設！

ラーニング・commons「SPACE」では、学生の皆さんの学びのために、授業・センターの推薦図書、指定図書、語学関係資料を豊富に揃えています。別棟の図書館と連携し、約5,000冊の資料がcommons内で利用できるようになっています。

学生の皆さんの学びやキャリアデザインのために、2023年度は新たに2つのコーナーを開設しました。手軽に読めることもあり、多くの学生の皆さんにご利用いただいています。

文学賞コーナー



キャリアデザインコーナー



↑ キャリアデザインコーナーは、キャリア教育科目担当教員と学習支援課職員が選定しています。今後もさらに充実していく予定です。

← 文学賞コーナーは、主要な文学賞を受賞した近年出版分の書籍を配架しています。

調べごとと相談

SPACE調べごとと相談（レファレンス）利用件数／2023年度秋学期

	9月	10月	11月	12月	1月	秋学期	%
学術文章作法	0	10	14	8	2	34	71%
演習（卒論）	0	2	2	1	1	6	13%
その他	1	2	1	3	1	8	17%
合計	1	14	17	12	4	48 (51)	

※調べごとと相談は、
①対面
②Zoom
③メール
を併用して行いました。

() は昨年度

HELP DESK

HELP DESKでは、秋学期は対面でサービスを行いました。学習相談は事前予約の他に、空いていれば飛び入りでの利用も受け付けています。学習相談の利用者統計を見ると、予約よりも飛び入りで気軽に学習相談を受けている利用者が多いことがわかります(表1)。また、HELP DESKでは毎月学生のニーズ

に応じた学習セミナーを実施しています。秋学期には簿記、海外研修、TOEIC、留学、GPA向上などをテーマに、5つのセミナーが行われました(表2)。また、セミナー終了後にはHELP DESKのInstagramでセミナー内容の「チラ見せ」も行っています(図1)。ぜひフォローしてください。

■表1 HELP DESK学習相談利用者

2023秋学期	9月	10月	11月	12月	1月	合計	%	前年比
予約	5	6	8	4	0	23	30.7%	0.96
飛び入り	16	15	13	7	1	52	69.3%	0.71
合計	21	21	21	11	1	75	100.0%	0.77

■表2 HELP DESK学習セミナー参加者

No.	実施日	セミナー名	参加者
1	9月27日	100%役に立つ！ゼロから始める簿記セミナー	8
2	10月18日	充実した長期休みに！海外短期研修セミナー	12
3	11月 3日	TOEICスコア爆上げ大作戦セミナー	75
4	11月29日	大きくはばたけ！留学セミナー	7
5	12月13日	目指せGPA向上！期末試験&レポート対策セミナー	4
合計			106



図1 HELP DESK Instagram

日本語ライティングセンター

日本語ライティングセンター（JWC）は秋学期、チュータリングは対面で、レポート診断はオンラインでサービスを行いました。基本的にチュータリングは予約が必要ですが、秋学期より空き枠がある場合は、飛び入りも受け付けるようになりました。当日の飛び入り可能枠はJWCのカウンターで確認することができます。秋学期、チュータリングは利用者が前年比で1.87、レポート診断は1.19と、特にチュータリングの利用者が増加しました（表3）。また、JWCはSPACeレファレンスや中央図書

館と連携しながら、書くことや読むことを支援する学習セミナーを行っています。中間レポートや期末レポートの作成時期には、「術的文章作法Ⅰ」の担当教員による「レポートお助け隊」も実施しています。「チュータリングはちょっとハードルが高いなあ」と心配な方は、まずは「レポートお助け隊」からお試ください。

■表3 JWCチュータリング・レポート診断利用者

2023秋学期	9月	10月	11月	12月	1月	合計	%	前年比
チュータリング	1	67	74	74	14	230	53.1%	1.87
レポート診断	1	19	72	89	22	203	46.9%	1.19
合計	2	86	146	163	36	433	100.0%	1.48

■表4 JWC学習セミナー参加者

No.	実施日	セミナー名	主催	参加者
1	10月27日	レポートお助け隊	JWC	9
2	11月17日	文献検索セミナー【実践編】	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	7
3	11月27日	レポートお助け隊	JWC	8
4	11月29日	行楽と歌の楽しみ～万葉集の美を家持の歌で味わう～	図書館・JWC連携	81
5	1月25日	絵本ブッククラブ	図書館・JWC連携	12
合計				117

SPACeスタッフ研修

SPACeで学生の支援を行っている、HELP DESK、日本語ライティングセンター、データサイエンスセンターのスタッフ合同で3月25日に「共感型コミュニケーション（Non Violent Communication 以下NVC）」のワークショップ型研修を行いました。講師は佐藤広子先生（前学士課程教育機構准教授）です。私たちはややもすると「相談者に何か適切なアドバイスをしなくては」と先走って自分の頭で考えてしまいがちですが、NVCでは相談者の話を傾聴し、身体をフル活用して相手の気持ちやニーズを汲み取っていきます。傾聴する、共感するということがどのようなことなのかについて、体験的に学習する機会となりました。事後アンケートをみると「業務面だけではなく、



自分が何か大変なことや困ったことに衝突した際に、自分の気持ちを安定させることにも役立てたいと思った」など、実りの多い研修になったようです。

2023年度 学士課程教育機構主催のFD・SDの取り組み【秋学期実施分】

■ 第10回創価大学教育フォーラム

9月30日(土) 13:00～16:30、第10回創価大学教育フォーラムを開催し、学内外より大学関係者や学生ら80名を超える参加がありました。田中亮平機構長の挨拶の後、経済学部、法学部、教育学部・文学部、IR室による分科会を挟み、基調講演として玉



久保田教授

川大学教育学研究科 久保田善彦教授より「新しい学習観から見た授業改善の工夫」と題して、ご講演いただきました。参加者からは「教育行政の政策ビジョンがよくわかりました」などの声が寄せられました。

■ 第3回・第4回 学士課程教育機構FD・SDセミナー

10月25日(水)、2024年1月30日(火)に学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。第3回は早稲田大学 理工学術院の深澤良彰教授に講師をご担当いただき、「生成AIと高等教育機関におけるその活用法～教育とその評価を中心に～」と題して、ChatGPTを例に挙げながらご講演いただきました。参加者からは「ChatGPTの原理から説明を受けることで、不得意分野や架空の情報が生成される理由が納得できた。」等の感想がありました。また第4回は株式会社 ビズアップ総研 専任講師の堺真理子氏にご担当いただき、「お互いを尊重し、守る為のハラスメント防止研修」と題して、オンラインでお話いただきました。参加者からは「基本的な考え方とともに具体的事例や裁判例等を提示いただき、分かりやすかった。」等の声が寄せられました。

新任教員研修

■ 第3回新任教員スタートアップセミナー

2024年1月20日(土)、2023年度第3回新任教員スタートアップセミナーを開催し、2022年9月以降に採用された新任教員14名が参加しました。関田一彦 CETL センター長による開会挨拶の後、授業実践事例の共有、東北大学産学連携教育イノベーター育成プログラムのオンデマンド教材視聴と意見交換、システム支援課の樋口伸彦係長による「eポートフォリオの活用」の紹介などを行いました。参加者からは、「このような教員の学びの支援を受ける機会はなかなかこれまでありませんでしたので、感謝しています。」などの声が寄せられました。



スタートアップセミナー

その他のCETL勉強会／研修会

2024年1月25日(木)、2月20日(火)、3月14日(木)の3回にわたって「生成AI活用に関する情報交流会」を開催しました。

第1回は総合学習支援センターの高橋博美助教に「ChatGPTで実現!?：教員の業務軽減と教育のパーソナライゼーション」、文学部人間学科の福博充講師に「日本教育学習評価機構(JEIEL)主催『ID(インストラクショナルデザイン)と生成AI』WS参加報告」と題して



AI活用情報交流会

お話しいただきました。第2回は総合学習支援オフィス学習支援課の木村孝二さんに「大学コンソーシアム大阪 SD勉強会『生成AIの仕組みと限界』参加報告」、同オフィスシステム支援課の本多光紀係長に「生成系AIははじめの一步～便利ツールや事例の紹介～」と題してお話しいただきました。第3回は総合学習支援オフィス学習支援課の齋藤康夫課長に「UeLA(大学eラーニング協議会)フォーラム参加報告(生成AI活用事例の共有)について」、経営学部経営学科教授の望月雅光先生に「生成AIの授業での活用と研究での活用の可能性について」と題して、他大学の授業実践・生成AI活用事例などについてご紹介いただきました。

各回、活発な質疑応答、参加者同士の意見交換も行われ、参加者からは「生成AIについて自分1人では中々、情報収集に限界があるので、研修を通して他の先生方と意見交換しながら学べるのは大変ありがたい。」等の声が寄せられました。

データサイエンス副専攻の開設から5年を迎えて

■ データサイエンス教育推進センター長 浅井 学

■ データサイエンス副専攻は、超スマート社会（AI×IoT社会）の到来が予想される時代にあって、データサイエンス教育のニーズや関心が高まっていることを受けて、2019年度から開設されました。2024年3月末をもって5年の節目となります。2023年度の卒業生のうちデータサイエンス副専攻の修了者は40名であり、他の副専攻と比べても突出して高い数字となっています。「学生主体」の大学として、新たな制度が学生たちのニーズに応えているという成果を喜びとともに、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

■ 開設前の状況としては、文系の学生たちから情報システム工学科の先生たちに「プログラミングを学びたい」という相談が多く寄せられるようになり、学生たちがデータサイエンス（またデータエンジニアリング）に強く関心を示している様子が伝わってきました。この時点で想定される問題として、学生がレベルに合わない授業を履修してしまうと、当然、授業についていけないので、履修を取り消したり、単位を落としてしまうことが挙げられます。学生たちの挑戦が、失敗によって劣等感に置き換わってしまうのは非常に残念です。文系の学生たちが、きちんと段階を踏んで力をつけていけるようにしたのが、データサイエンス副専攻です。副専攻の履修科目表をみても、最初に学んでおくべき科目がわかるようになっています。またデータサイエンス教育推進センターのホームページに履修モデルを掲載して、学生たちに周知するようにしています。

■ 科目については、アメリカ統計学会が2018年6月に発表した「データサイエンティストに求められるスキルTOP10」を参考に、専門科目を寄せ集める形でスタートし、その後は拡充に努めてきました。1番の目玉となったのは「データサイエンス入門」（2単位）です。この科目は2021年度より開講され、2022年度からは全学生の1年次必修科目となりました。また「データサイエンス入門」は、文部科学省が推進する数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）に認定され、入門レベルのデータサイエンス教育として大切な役割を果たしています。

■ 次に副専攻では「データサイエンス入門」を学んだ後に、各学部または共通科目の統計学基礎科目を履修したうえで、

必修科目である「データ・サイエンス」（4単位）と「AI基礎」（2単位）を履修することになっています。この「データ・サイエンス」と「AI基礎」は、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）に認定されています。これにより学生たちは、自身の学問分野に応用していけるだけの基礎を身につけることができます。なお、2023年度生が2年生となる本年度より、「データ・サイエンス」（4単位）は、「データサイエンス」（2単位）と各学部のデータサイエンス演習科目に分割されます。学生たちは6単位を取得することには変わりはありませんが、そのうちの2単位分は自身の所属する学部の演習科目となっていることが大きな特徴です。

■ また副専攻科目には、産学連携科目が含まれています。共通科目の「データサイエンス演習A：日本IBM共催」と「データサイエンス演習B：アクセンチュア後援」です。日本IBMの共催科目は2021年度に開講され、今年で4回目の開講となります。応用基礎レベルのデータサイエンスを学んだ学生が、ビジネスの視点から実力を伸ばしていけるような内容となっています。履修した学生の中から、外資系企業のデータサイエンティスト職だけでなく、その他の分野でも採用を勝ち取る学生が出てきています。またアクセンチュアによる後援科目は2023年度にスタートしたばかりですが、データサイエンティストを目指す学生たちの専門性がさらに高まるような内容になっています。いずれの科目でも、本学の卒業生が講師を務めてくださっています。母校の発展のためにご尽力くださることに、この場をお借りして御礼申し上げます。

■ 以上のように本学のデータサイエンス教育は、文系の学生たちが①入門レベル、②応用基礎レベル、③データサイエンス副専攻として段階的に学べるようにカリキュラムが構成されています。また理系の学生たちは、上記に加えて④情報システム工学科のデータサイエンス関連の科目を学ぶことができます。文系であっても、理系であっても、段階的な学びを通して、高い専門性を身につけることができるように制度設計されています。本センターは、今後も学内外と広く連携をとりながら、創価大学のデータサイエンス教育のさらなる充実化に向けて取り組んでいきます。

学士課程教育機構
新任教職員紹介学士課程 准教授 土屋 信三
SPACE 助教 黒須万貴子WLC 助教 アローラ・クリティ
ツヴェトミラ・ニコラエヴァ・カディエヴァ
ポー・タオ・グエン

創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第27号
発行日 2024年5月17日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<https://www.soka.ac.jp/seed/>